



土師ダムの効果について

土師ダムは、昭和49年3月に多目的ダムとして建設されました。

江の川の本格的な改修は、昭和28年から行われて来ましたが、昭和40年・47年に、従来の計画以上の降雨で、相次ぎ大洪水に見舞われました。このことにより、基本高水を大幅に改定し、ダム群の建設により、尾関山における基本高水10、200m/sを7、600m/sに調整されました。土師ダムはこれを基本計画として、①江の川の治水対策 ②広島市東部及び呉地区の工業用水、生活用水の補給（太田川だけでは不足するので、土師ダムからパイプライン送水を実施。） ③江の川沿川の干ばつ対策の水源確保 ④発電（太田川水系に送水する水を利用して発電。）の四つの目的を兼ねる多目的ダムとして役割を果たしています。

運用に当たっては、梅雨や台風の頻度が多い洪水期（6月～10月）に、水位を下げて洪水調整に必要な容量を確保しています。また、洪水の頻度が少ない非洪水期（11月～5月）は、水量を確保し、飲料水・工業用水の供給や発電の利水とされています。このダムの活用方法により定められた、治水独自でダムを建設した場合の費用と、利水独自でダムを建設した場合の費用（身代わり建設費）の比率

により、土師ダム建設費用の負担が行われております。

また、近年の集中豪雨などで、降雨特性が建設時の想定から変化してきています。北広島島の降雨による流入でダムが放流すると、江の川の水位が上昇し、同時に安芸高田市に降雨があると、例えば、



多治比川の流水が江の川に流れなくなり、内水の被害が生じることがあります。このような場合「適応操作」により放流量を出来るだけ少なくし、下流域地区への被害を低減して頂いています。

最近では、7月3日17時から5日13時にかけての集中豪雨で土師ダム流域に232mmの降雨があり、ダムに流入

する水量が820m/sを記録しました。これに対し土師ダムによる「適応操作」で、吉田地区ではそのまま放流するより1.4mの水位低下ができ、被害の低減が生まれました。

河川の高水敷は、江の川では野球の練習グラウンドなどとして活用されています。土師ダムは広島市に近い全国にまれな里ダムであり、都市部から移動しやすい絶好な場所に位置しています。国としても、建設時から高水敷の活用には格段の配慮がなされています。市にとって土師ダムは、①ダムを周るサイクリング道路（自転車道） ②サッカー場等運動広場 ③「のどごえ公園」等の公園広場 ④ダムを周遊する「桜並木」、また近年では、⑤西日本一を誇る「BMXコース」 ⑥「グラウンドゴルフ場」 ⑦子どもの遊び場としての「遊具」の整備 ⑧カヌー競技場といった、スポーツ・観光・環境・防災等街づくりには欠かせない空間です。主目的である治水対策や利水に支障を与えない範囲で、活用をお願いしているところです。

高水敷の利用は、ルール（洪水時には、遊具・ネット・仮設トイレなど、浮遊する可能性のあるものは移動。）を守って有効活用することが大切であると考えます。